



# 針葉樹會報

通卷 第六十一號

## 追悼關根修君

故人略歴

大正六年二月廿二日誕生

昭和四年四月東京府立第一商業學校へ入學

昭和十年四月東京商科大學専門部へ入學

昭和十年六月神津牧場行

同十一年一月一橋山岳部へ入部

同年一月廿五日—廿六日富士山スキー行

同年三月十三日—十七日野澤温泉スキー合宿

同年三月十八日—廿日木曾御岳

同年五月十日—十七日立山及劍岳

同年七月十二日—廿日穗高涸澤合宿（奥穗高、涸澤槍側稜、

デヤンダルム、北尾根等に登攀）

同年十月廿一日房州館山にて永眠す。

關根修君と私

松浦靜雄

修君、君は突然この世を去つて後に残された私が御靈前に御悔を述べなければならぬ事となつてしまつた。無二の親友に先立たれた私の悲歎は想像にあり餘るものがある。忘れもせぬ拾月廿二日の朝、私は君の死に驚かされねばならなかつた。わづかその三日前平素の元氣な君に會つて居た私にはどうしても信ぜられない事であつた。幾度か打消しては見たものの、その確報なるを知るに及んで、あまりの意外さに只啞然として涙にくれるのみであつた。

君は何の豫告もなしに忽然と逝いてしまつた。何故一人黙つて此の世を去つて行つてしまつたのだ。何故私に一言も打開けては呉れなかつたのだ。然しそれすら出來なかつた君の性質であつたのだ。呼べども再び歸らぬ君ではあるが、それを思ふ時私の胸ははりきんばかりである。

君は私にとつて、あらゆる方面で切つても切れない關係にあつた。其の交友の度はありきたりの交友のそれとは比較する事の出来ぬ程深く、君の面影は私の腦裏深く、一生涯去り得ないであらう。否、君は終生忘れる事の出來ぬ私に對する存在であつたと云はれるのである。今思出を辿りつつ筆を走らせて居ると涙は新しく瞼より浮び出て紙面をぼやかし運筆の進度をとゞめしめる。

× × × ×

今を去る六年前、私が澁谷の府立商業二年の時であつた。當時面白半分にやつて居た柔道仲間に、小柄で見るからに温和しい一

人の少年が居た。常に微笑を浮べて居る、無邪氣な子供くした少年ではあつたが華奢な體付に以合はず腰の粘りが案外強く、生意氣盛りの私等は度々苦しめられたものだつた。程なく口を聞き合ふ様になり、それ以來組こそ違へ不思議に氣が合つて、何をなすにも一緒に行動する様になつてしまつた。これがそもそも君を識つた最初であつた。以後六年の長きにわたつて、共に語らひ共に種々な事をして來た仲だつた。そして其等の事も今は全て悲しき思出とはなつてしまつた。澁谷鉢山のあの縁深き夕陽ヶ岡の一角に第一商業時代の幾多の懷しい思出をさぐる事が出来る。庭球、卓球、弓道等共に樂しみ、練習したものだつた。一商四年の秋、私は病を得て二ヶ月程病院に入つて居た事があつた。淋しい生活を送つて居た私は毎日缺かさず見舞に來てくれた。その様に優しい君だつたのである。その時の君の御厚情は一生忘れる事が出来ない。商大入學の爲の受験勉強も共に苦しみ合つた君だつた。生來運動の好きだつた君とは、その頃ですらよくスケート等滑りに行つた事を思出す。スケートと云へば、東京に生れた悲しさに天然氷ではなかつたが、當時出來たての屋内リンクで良くな滑つたものだつた。一時非常に熱中した君が私達でホッケー・チークを造らう等と計畫した事もあつた。商大入學頃から君は見違へる程に背丈が伸びて、益々快活な青年に成長して行つた。人づれのして居ない溫和しい君は、君を知つた誰しもが好感を抱かずには居られないものを持つて居た。従つて君は多くの友を持ち、誰からも愛せられて居たのだつた。君は又一面非常に家庭的な親思ひの深いところがあつて、山へ行く様になる迄は友達同志で旅

をする等と云ふ事は君には考へられない事であつた。

二人で行つた初めての山旅は、たしか昨年六月の事であつた。——それ以前にも君は毎年冬になると眞黒になつて、スキー地から歸り、種々な事情で行く事の出來なかつた私を羨ませがらせたものであるが、——日増しに暖かになつて行く、六月のある日曜日の早朝、私達は未だ明けやらぬ眞暗な輕井澤の町を、折からの濃霧をついて勇んで歩いて行つたのだつた。何處か静かな所へ行つて思ひ切り歩いて見たいと云ふ君の提案で神津牧場を訪れる事になつたのである。快晴に恵まれた日で八風山からの眺望は素晴らしいものだつた。アルプスの容姿に感激した君が、「この次は如何しても南へ行くんだ」と息まいて居たのに、その南へも行かぬ中に君は、歸らぬ旅に去つてしまつた。其時以來君は山に對して深い興味を持つ様になつて行つた。然し厳格な家庭に育つた君には友達と山へ行く事等許されぬ事であつたらうし、又私もそれを考へ強ひて誘ふ事も出來なかつたのだ。其爲昨冬の乗鞍合宿には何故誘はなかつたのだと、隨分と後から君の怨を買つたものだつた。

今年の一月の事であつた。「いよく山岳部へ入ることが出来るぞ、親父のお許しが出たんだ」と君は小躍りして私のところへやつて來た。君の入部歡迎登山を兼ねた山行が同月の富士であつた。其の時の大澤の雪質は絶好で、ゲレンデで育つた君が雪煙渦巻く大澤の廣大な斜面に肝をつぶして滅茶苦茶に轉がつて居た有様や、歸途の登山道滑降では最後にとり残され雪だるまになつて夢中で降つて來た君の姿等鮮やかに瞼の裏に残つて居る。」アイゼ

ル「ピッケン」等と皆を笑はせたのも、その頃の事であつた。それからも厳しい家庭に育つた君は山へ行くには相當苦心して居た様に思ふ。私が山へ行く度に、「君は圖々しくて得だなあ、俺は氣が小さくて如何も云ひ出せないんだ。損な性分なんだな」と口惜しきうな顔をして見送つて呉れたものだつた。君が突然短かい一生を終へると知つて居たならば、もつと君の愛して居た山へどし／＼行かせたかつた。もし行つて居たならば……等と盡きせぬ口惜しさが沸いて來て殘念でならない。

三月の野澤合宿、木曾御岳登山、五月の立山剣、今夏の洞澤合宿、等皆行を共にした山行である。野澤小唄に聞き惚れて懸命に口吟んで居た君、御岳頂上で得意のライカのフィルムを切らして地獄谷の絶景を撮れなかつたと地園駄踏んだ君、スリップの練習をしそこなつて素頓狂な叫をあげた君等々思出せば限りがない。

五月の立山剣は一緒に行つたものの中でも殊に印象の深いものである。重い荷で良く頑張つた君だつた。連日快晴に恵まれ愉快な一週間を送る事が出来たが、歸京後顔の黒いのには當分の間苦しめられたものだ。山毛櫟坂の手前でスキーを着けた途端にスピツエを折つて、くさりながらボコ／＼すさまじい格恰で歩かねばならなかつた君の姿や、裸で雄山へ登つた時の珍な眺め等臉の底に鮮やかである。或る夜、それはたしか先發隊と後發隊とが鏡石天狗平小舎で合した日であつた。小舎の隅から誰やらが見付け出した、得たいの知れぬ濁酒に暖まりながら怪談に花を咲かせ君が怖がつて一人で便所に行く事が出来ず、蒲團をかぶつて寝てしまつた事を思出す。君は常に一行の人氣者で、數々の面白い傑作をや

らかしたものだつた。君と話して居ると自然に氣分が慰さまつて朗らかになる事が出来ると皆で大笑したものだ。

今夏の夏山合宿が、君と私との最後の共同生活となつてしまつた。「此次は何處に行かうか」と話し合つた君も最早如何する事も出来ぬ、あの世の人となつてしまつた。

×            ×            ×            ×

あゝ君はもう此世には居らぬのだ。しかし私にはあの元氣な君が今尙其儘懇意について死んだ様には思はれない。否、生きて居て何處からかひよつこりと現はれて來るとより思はれないのだ。運命とか壽命とかに片附けるべくあまりにも悲しい事實である。今さらながらに人生無常を感じ、後に残されたる者の悲哀を感じざるを得ない次第である。

静かに君が冥福を念じつつ思出の一端を誌して新しく浮び出る哀悼の涙と共に君が靈前に捧げる。 (一九三六・一一・一六)

憶　　ひ　　出

新　　羅　二　郎

宇宙等と云ふ大きな存在を考へる時、人間の間の小さな出来事なんか問題にならないかも知れない。然し地上で生活して居る吾々にとつて、個人相互間の事柄は大なり小なり吾々の思想に影響を與へる。まして一人の人間が永久に居なくなつたと云ふ事は、少からず問題とされざるを得ないだらう。

實際快男子關根君が急死したと聞いた時は驚いた。常に人一倍快活で全く好ましい存在であつたゞけに。

色々な友人の中でも特に山に憧れる吾々にとつて、過去の樂し

き山旅を想ひ出す時、その樂しさを共に味はつた友の想ひ出はたまらなく懐しい。關根君を知るやうになつたのも全く山を通じてだつた。それは今年に入つてからで未だ一年にもならない交りだつたけれども、たつた三人と云ふ専門部の部員同志だつたゞけに親しみの情は一入深かつた。一月の末だつたか一緒に富士に登つたのが始めてだつた。スキーには相當堪能な彼だつたが、馴れぬラツセルには相當參つて居たつけ。三月には野澤の合宿で一緒だつた。體格のいゝ彼はよく體力が續いた。休む事なく常に動き大膽によく滑つた。だから隨分上手になつた。またよく眠る男だつた。七月の夏山合宿は期間が相當長かつたせいもあるし、又毎日彼と一緒に行動して居た爲めか想ひ出が一番深い。彼は働く事を厭はない男だつた。自ら進んでつらい事をよくやつてのけた。實に愛すべき彼だつたのに。

一見樂天家のやうに見える反面に、彼は或る悲しさうな所があつた。時々彼も口にしてたやうに、何か家庭的惱みがあるやうだつた。六月の始め僕と松浦と二人で八ヶ岳へ出掛ける時、どうしても行けないつて淋しさうな顔をして居た事を想ひ出す。

三年の僕達二人が來春卒業した後の唯一の後繼者だつた彼の死は、専門部に山岳部員が居なくなるのかと思ふにつけて淋しき極みだ。

關根よ！ 何故あんなにホツクリと死んでしまつたの？

此の冬又一緒にスキーに出掛ける約束がまだ済まないぢやないか？

何と云つても、もう仕方がない。彼はもう唯の骨粉に化して了

つた。もう僕達はあの愛嬌のある笑顔も見る事が出来ないし、あの親しみ深い聲も聞けないんだ。

唯吾々は彼の冥福を祈らなければならない。

昭和十一年十一月十四日

以上

### 關根君のこと

柿原謙一

私が關根君を知つたのは、此の三月の野澤スキー合宿の時であり、共にした山行はその合宿と此の夏の涸澤合宿の二つに過ぎない。然も是からは、關根君とは永久に山に行くことが出来ないと云ふ、想えば實に短い交際に了つてしまつた。然し關根君の印象は、そうした短い間の交りにも不抱、強く私の胸に宿つてゐる。

野澤の宿の三階で初めて君を知つた時は、アノ人にこだはらない性質に妙に心を惹かれた。全く陽氣な新入部員だつた。野澤小

唄の踊を一生懸命に、武器ツチヨな手振りで練習してゐた助サンと鷹野君の襟袍姿と共に、動物園の小猿の様に無邪氣に笑ひ乍らおいまチヤンにお汁粉を無心に行つた君の姿は、春の野澤のコミツシユな想出として残つてゐる。「汁粉出せ出せ汁粉を出しやれ、汁粉出さなきや唐紙破る」と冗談に怒鳴つた山男達の一人としての君の姿が目に浮ぶ。

此の七月の涸澤合宿では、私は新宿から松本・島々・鍋留・德本・徳澤と全く君と共にし乍ら、憧れの穗高の山懷に抱かれてゐた。小猿と言ふ渾名を裏書きする君の天真な無邪氣さを、私は天幕の中でよく見受けた。越中褲一つきり持つてなかつた私に、ボンと猿股を別けて呉れたのも君だつた。

涸澤を降り、歸京する時の君の姿には心持ち寂しさを感じないではなかつた。然し相變らず元氣な、勇ましい君の山行の姿は、眞夏の太陽の下に黒光りに耀く奥穂を背にして間もなく數名の部員と共に偃松の間に消え去つてしまつた。なじかは知らねど心わびしと、殘留した吾々が岩の上でとかげをしてゐる時。

それが君の最後の山行の姿だつた。そしてもう永劫に見られな後姿となつた。君の死を見せつけられて私は、輕業をして聖母マリアの像を慰めた輕業師の話を想ひ出した。君の死は餘りにも悲惨だつた。

たゞ御冥福を祈つてゐる。

### あの夜のこと

小谷部全助

十月二十二日の夜、秋と言ふのに妙に静かな暖い様な晩であつた。何とはなく寝苦しい儘に讀書等して居る時だつた。もう夜中も十二時近かつたらう。『速達！』の叫びに受取つて見ると新羅からだ。何事と返し見た刹那嗚呼何と云ふ事だ。驚いた事には昨夜

關根君が急病で死去しました云々』と。もう讀書所ではない。馬鹿みたいにちつと床に仰臥したなり眠れなくなつて了つた。やが

て響き渡る諸行無常の鐘音に私の胸は不安と焦燥に絞め殺される様な苦しさを味つて來た。嗚呼！あの陽氣な、元氣な關根が、つい此間試験最中元氣で會つた彼が……。本當に夢の様だが矢張り嘘ではないのだろう。僅か一年足らずの交際だつたが、比較的充實した彼の記録の大半を共にした爲か何だか長年の交りの様に思へてならぬ。一月の粉雪を愉快に滑つた富士山行が最初で、

それ以來三月の野澤、五月の立山スキー行、夏の涸澤合宿と様々な記憶が走馬燈の様に頭をかすめて益々目は冴えるばかりだ。もう午前二時頃だらうか電車の響も聞えない。よく親しい者が死ぬと知らせが來ると言ふが、カタ／＼と階段を登つてその唐紙をスーツと開け、あいつが『小谷部さん』と例の調子で顔を出さんぢやなからうか。そう思ふと暗闇に一寸おどけた様なあいつの顔がぼんやりと浮き出して來る様だ。雪に埋れた天狗平の小屋で『お前のつらを見てると實際慰さまよ』なんてよく言ひ言ひしてからかつた事や、涸澤の大天幕で面白さうに燥いで居たあいつの様子がまざ／＼と思出され何とも云ひ様のない寂しい様な妙な氣持になつて了ふ。嗚呼！立山の銀嶺を赤々と染めて沈まんとする夕陽。しづくと這ふ夕霧の彌陀ヶ原。嗚呼！！再びあいつを其名も清い淨土ヶ峯へ連れて行き共に又からかひ合つて金波銀波の雲海をゆるがす程に笑ひ度いものだ。否、あいつの靈は既に憂き世の束縛を脱し、今頃は新雪の峯々を自由に飛び廻つて居るに違ひない。

(十一年十一月四日)

### 關根君を傷みて

小林重吉

關根修君と知合になつてから丸一年も經ないので、同君の印象は拭ひ切れぬ程はつきりと心に刻み込まれてしまつた。私は最初會つた時から愉快な氣分の好い學生が山岳部へ入つて來たと悦んでゐた。

同君と山行を共にしたのは僅かに涸澤の合宿だけだつたが、それだけでも彼の性質が如何に善良で好ましいのであつたかを理解

するには充分だつた。

噫乎彼の元氣な聲音は未だに耳に残つてゐる。今年の夏のキヤンプ生活での思ひ出、重い荷を背負ひながら元氣に涸澤の谷を登つてゐた彼の姿、ヂヤンダルムの頂上で一緒に菓子を食つた時の様子、僕等より二三日早く涸澤を下つて行く時の名残惜しさうな後姿、それも皆今は悲しい思出と成つた。

部室にも山にも彼の姿が再び見られなくなつてしまつたと思ふと、私の心は非常な寂しさに沈むのである。

### 追憶

森脇芳之

ネエーと幾分鼻に掛つた特有な人懐い聲と共に隣りへ座り込む君だつた。アイゼルがね、ピッケンがねと何の屈託もなく明るく朗らかに話しかける君だつた。雪の御嶽で共に語らひ、春の立山を共に歩み、涸澤の夏を共に送つた君。關根——何うして——何うして逝つたのだ。

今夏の涸澤の合宿が終つた日、君は都へ、私は本谷から槍へと別れる事となり、先のある私は不要なゾムメルとアイゼンを君に托したのだつた。歸り道とは云へ自分の荷の上に重い物二つ隨分迷惑な事だつたらう。然し君は喜んで引受けて呉れた。歸つたら新宿のオリエンピックをねと君に此の時約束した事がある。

別れて以來次に顔を會はしたのは十月に入つた國立の驛でだつた。

『オイ關根、オリエンピック覚えてるかい』

『忘れませんよ、あのオリムピック随分重かつたですよ』

交はされた語は少く君は試験の中だつたので何うする事も出来なかつた。其れから間も置かず君は逝つて了まつた。私は此の果し子へぬ約束を何うしよう。此の冬は乗鞍だと樂しみにして居た君、關根——何うして——何うして行つたのだ。

### 思ひ出すまゝに

望月達夫

それは今年の二月のこと、或る日なんなく皆んなが部室へ集まつた時だつた様に思ふ。『素晴らしい粉雪だつたぞ!』と最近富士へ行つてきた小谷部君が皆んなを羨ましがらせるやうに云つた。

山へ行つてくると素的だつたこと、快的だつたことに尾鰭を附けて行かなかつた連中をひがませるのは吾々の何時ものならはしがある。その時も小谷部君はスキーが快的だつたと云つて、學年試験眞近で相當イラ／＼してゐる吾々をくやしがらせた。『そう云へばねー』と彼は更に語を次いで『今度専門部から素晴らしい愉快な奴が入つたんだ、富士へも一緒に行つたんだがねー、關根とか云つたなー』と云つて關根とか云ふ彼と富士へ行を共にした、吾々には耳新たなその人が相當愉快な上に、張切つて居て、スキーもかなりやるし、第一山が無闇にすきな事を語つてくれた。吾々は無論同志を得て非常にうれしかつた。

關根修君の名が吾々部の連中に紹介されたのはこうした経緯からだ。更に其の時の小谷部君の話を思ひ出すと、はつきりしたことは記憶にないが、それでも關根君がピッケルとかアイゼンとかの名稱を教はつて、そいつを口にするに、ピッケンとか云ひアイゼルと云つたことで語る小谷部君も聞いてゐた吾々も腹をかゝえて

大笑ひしたことだけはよくおぼえてゐる。これが有名になつて了つた爲に入部してからも君は部室に姿を現す度に、暫くはピッケン、アイゼルとからかはれ、『ピッケン』位の綽名は頂戴しかねまじき程であつた。『いやー兎に角ふるつてゐるねー』『愉快な奴だなー』つて云ふのがその時の皆の結論であつた。そして吾々の眼の前に現はるゝ君が、どんなにか愉快な人にもちがひないと云ふ期待を吾々に與へて了つた。

こうして君は入部した。果せるかな吾々の期待は裏切られなかつた。君のあの天真爛漫な性質は全くユニークな存在として君を知るものに忘れられぬ印象を植えつけた。そして専門部二年の君は將來専門部山岳部をしょつて呉れるだらうと云ふ信頼を吾々にいだかせつゝ、部の中で健やかに延びて行つた。今年専門部を卒業した鷹野君なんかも専門部は兎角人數が少い折から君に大いに期待しつゝ學窓を去つたであらう。君の足跡は三月の御岳、五月の立山、更に夏の合宿と云ふ具合に、一路先へ先へと進んでいつた。

不幸にも私は君との行を只夏の合宿しか持たなかつた。それだけに又その時の印象のみ残つて居る。あの時は皆重荷に苦しめられて暑い陽を浴びつゝ涸澤へ這入つたものだ。そして一番重い荷は主に小谷部君が二番目に重い奴は森川君がかついだ。池の平近くなつて餘りたまらないと云ふので有志の者がこの二つを自分達のやつと交代にかついだ。がその有志たるべき者もそれ迄相當重いのをかついでゐるだけに中々名のりを上げぬ。おそらく小谷部君のは十二貫を越してゐたらう。之を交代した數少なき人の中に

君が居た。餘り大きくない體にもかゝはらず、莞爾として汗をふきつゝ君はあるの重荷をしょつて歩いて行つた。これ等も君の性格の一面を物語るのであらう。涸澤の合宿では愉快に暮した。そして君の印象もあらゆる部員諸君にさぞかし愉快な人として映じたことであらう。

九月の針葉樹會の時だつたか、始めてやつてきて型の如く自己紹介をさせられた。矢作さんだつたか『もう綽名はついたかい』と早速質問をあげせた。誰かゞタコと答へる。皆が一緒にニヤニヤした。質問の主は『タコはいゝね』といとも満足げであるし、そう云はれた君も例の得意な笑ひ顔を幾分赤らめて頭をかいて居たようと思ふ。

専門部の試験が始まつたのはそれから直きであつた。そしてそれが終了して暫らく后君は忽焉として他界してしまつた。あの元氣な無邪氣な、愉快で朗らかな君が——。針葉樹會へも九月の時が後にも先にも只一度の出席だつたし、山岳部へ入つてからも僅か一年足らずの月日だ。吾々とのつながりは餘りにも短い間である。

その上君は躬自らその生命を縮めたと云ふ。君と生前最も仲の良かつた松浦君でさえ、その原因については明かに知り得ぬと云ふ。吾々としても勿論わからぬ儘である。が敢て詮索する必要が何處にあらう。又わかつたとて何程のことがあらう。

吾々には只かつての朗らかな君があるのみだ。大聲で笑ひ、よく食ひ、よく荷をかつぎ、而もピッケンと云ひ、アイゼルと云つたあの君が——。君への追悼文が飛んでもないものになつて了つ

たが、私の筆が本當に朗らかだつた君の性格の一面を少しでも傳え得ればそれで充分である。曾ての日君が粉雪に思ふ存分ゑがいたであらう富士はもう新雪に輝いて朝な朝な美しい肌を見せてゐる。御冥福を祈りつゝ筆をく。

(一九三六・十一月)

追憶  
和田榮達

關根君が突然亡くなられたと知つた時眞實とは思へなかつた。平素非常に朗らかで、愉快な男だつたからだ。死ぬ前に一緒に山に登つて、四、五日も山中で暮せば氣分一轉したであらうにと、

今考へて殘念で耐らない。彼は一名「タコ」の名に恥じず、頭に手拭でも廻せば章魚姿そつくりだつた。立山に行つた時も助さんと互ひに渡り合ひ、一方が『君の顔を見ると氣が慰きまるよ』と云ふと、一方も負けずに同じ様な事と云つたつけ。彼は山は好きだつたが家の事情で數多くは行けなかつたらしい。體もよかつたし、將來一緒に山に行ける愉快な友の一人を亡くしてしまつた。

(一一・一五)

關根君を弔んで詠める  
森川眞三郎

雪白き山の風に舞ひ行きし木の葉の一つ淋しかりける  
如何にせん彼の高嶺にも咲き出でし千島桔梗のありと思へば

故關根修君の死を悼む  
岩崎利一

關根君死すの新聞紙記事を見た時、僕は自分の眼を疑はざるを得なかつた。しかし其の事實が明になつた時には、たゞ意外の念

につゝまれるばかりであつた。

僕は今でも修君が「やあ」とかいつて部室へやつて來さうな氣がする。けれども既に黄泉の客となつてしまつた彼にはその様なことは出來ない。たゞ僕は、故關根君の靈が曾遊の山々の清淨な頂、深谷、山稜の上に靜かなる休息を得られんことを祈るのみである。

思ひ出は  
大塚武

思ひ出は淋しかりけりひとり寒し  
部室の寫眞をじつと見付める

この前の日、閑暇つぶしに部室へ行つて、いつもかはらぬ室の中を眺めてみると皿時計のわきの潤澤合宿の記念撮影に目がついた。皆實に愉快な顔をしてゐる。いつまで見てもあきない。腹の底からこみ上げてくる可笑しさについ獨り笑ひをする。その中眼が故關根君の顔に移つた。一枚の紙にうつされた故人の面影が様々の聯想に變つたが、結局は淋しい一色に塗りつぶされて口を出た一句である。關根君と私との交りは短く且つ淺かつた。確か今年の三月頃野澤のスキーの前あたり部室で始めて君の顔をみた時はHと二人一寸反感を懷いた程であつた。野澤でもあまり親しくならなかつた。

月あかき潤澤の夜は樂しかりき  
ありし日の

潤澤はいろ／＼な意味で成功であつたが、部員懇親と云ふ意味

でも又大きな成功であつた。君を知つたのもこの時であつた。ワイヽと騒いで眞面目くさつた議論には軽はづみの口をきかない男、割合に本心のつかみにくい男として私には思はれた。涸澤の後は恐らくこの悲報を受けるまで君の顔を見た事もないし、噂も聞かなかつた。交りも浅かつた私には爆笑の蔭にある淋しい本心に入つて行く事が出来なかつた。既に無き今は唯短き交りを通して残つた君の印象を二つの句に託するのみである。

ひとり往けりたぎりたつ瀧つ瀬に

舞ひ落つる一つ葉の如く

岩と雪とたゞかれし若き日は終りぬ

静かなる温なる死に

### 關根修君の靈に捧ぐ

日江井正己

思へば僕と君とはあまり深い交際ではなかつた。君を僕が知つたのはほんの最近だつた。しかしその君との離別はあまりにも早かつた。今君と僕が全く異つた世界の間で話をしてゐるのかと思ふと、何だか信じられぬ様な氣もする。今夏涸澤の合宿では君は大へんに快活だつた。天幕内の晴やかさを一人でリードしてゐる様な感があつた。それなのに君の心の中にはもうこの世の中に希望を失つてゐたとは誰が知らう。

嗚呼僕は君を咎めはすまい。しかし僕は一橋山岳部の爲に君のやうな快活なる人が散つていつた事を惜む。

涸澤に集ひし事のみ思はれて君の靈は黄泉にありき  
昭和十一年十一月十三日

静かなる夕に記す

## 山岳部報告(十月)

### 記録

(1) 大武川遡行——仙水峠——北澤峠——伊那(一〇・一六)

一八) 小谷部 森脇 小林 和田 森川

雨の爲摩利支天南稜、鋸岳等の登攀を放棄す。

(2) 鹽山——奥千丈尾根——國師大弛——梓山(一〇・一七)

一九) 中川 吉澤 近藤の三氏 柿原 望月 岩崎

(3) 日野春——甲斐駒ヶ岳(一〇・一八一二〇) 水田 里見

宮城 高橋(天候悪き爲頂上に至らず)

(4) 柳澤峠——落合——氷川(一〇・一八一二一) 大塚 日江

井(雨の爲秩父縱走を斷念して下る)

(5) 甲斐駒ヶ岳——鋸岳——仙丈岳——伊那(一〇・二八一一)

一・二) 大塚 日江井

仙丈で積雪二尺、充分初冬の山を味ふ事が出来た。

日 誌

○定期部員集會 於國立部室

十月五日(月) 出席部員(本科七名豫科一名)

同十九日(月) 出席部員(本科五名)

同廿六日(月) 出席部員(本科六名豫科四名)

○杉浦徳次郎先生送別會 十月廿六日 於新宿オリムピック

主賓 杉浦先生 出席部員(本科六名豫科四名)

此度歐洲へ留學を命ぜられたる杉浦先生の送別會を開く。先生には約一ヶ年の御豫定にて主として巴里に滞在せらるゝ由。ド

フイーネあたりへ御登行さるゝとの御抱負を承り一同大いに羨望した次第である。先生の御健康と幸多き御登行とを祈る。

○既に會報前號で部員關根修君の計報は御承知のこと、存じます。同君は十月廿一日房州館山に於て永眠されました。遺骸は彼地にて荼毘にふせられ廿二日歸京。生前最も關係深かりし松浦、新羅の兩君は急ぎ麴町の關根家を弔問し、變り果てた關根君の姿に接す。廿三日は丁度針葉樹會ではあつたが小谷部君等の六名御通夜に列席し、尙山岳部より花環一基を靈前に捧ぐ。告別式は廿四日自宅に於て執行せられ、部員多數會葬せり。

### 通 信

此のお正月には是非スキーに行く積りで居る。候補地は左の三ヶ所、誰かと一緒になれたら良いと思つてゐる。

- 一、野澤
- 二、大山
- 三、乗鞍

野澤は會社の人には是非連れて行つて呉れと頼まれてゐるので、行けば一月二日から五日位までの間だ。大山とは、伯耆の大山だ。一説によればスキー場としては赤倉の様な所で、非常につまらぬとも云はれてゐるが大山に登るのは良いと思ふ。大山へ非一度行き度いと思つてゐる。乗鞍へは行けば飛驒側からで、是は實は會社の造林小舎が九藏の一寸上の小俣谷にあるから其處を根據とする積りだ。此の邊へ行く人があつたら、會社の小舎に泊れる様御世話します。

堀岡

清

○久住山（十月十七日—二十日）

堀岡  
清

○久住山（十一月三、四日）  
○三峠山（十一月三日）

手塚晴雄  
吉澤松次郎

### 消 息

山口稔一君（舊姓芋川）十一月二日結婚、上記の通り改姓、夫人は徳子さんと申上る。本郷區向岡彌生町四番地ほノ二十號に新居を營む。尚次號に新生活の模様を報告する人がある由。

太田又一君 過日妹さんのお芽出度で上京の處、多忙の爲歓迎會を開くことも出来ず、誠に殘念であつた。

松木謙三君 兵庫縣西宮市越水西田町五丁目一番地に轉居  
小柳二郎君 杉並區阿佐ヶ谷二ノ五九五 齋藤方へ轉居

### 會 合

○關西針葉樹會 十一月十一日 於新 三 浦  
○定例集會 十一月二十日 於如水會館  
○忘年會 十二月八日 於銀座公樂

### 編輯後記

紙面の都合で記録と會合の詳細は次號に譲ります。關西の模様をお知らせする事の出來ないのは遺憾ですが、要するに今後彼等はモリ／＼頑張るさうですから、新春と共に本誌の内容も充實するでせう。中川・吉澤氏等は野澤に、山口・鈴木氏等は八甲田山に、それ／＼計畫もある様子です。では、眞黒な顔になつて、良いお正月を迎へませう。